

## シェイクスピアの「時間」をめぐる断章

酒井正志

古来、多くの思想家、哲学者、科学者が「時間」をどうとらえるか思索を重ねてきた。アウグスティヌスが『告白』（第11巻14節）で「時間とは何かを誰からも問われないかぎり、私はそれは何なのか知っている。だが誰かからそれは何かと問われるや、私は時間とは何なのか分からなくなる」と語っているように、我々にとって「時間」はとらえにくい問題である。シェイクスピアは John Bartlett の A Complete Concordance to Shakespeare (Macmillan, 1979) によると 'time' という単語を 1054 回使用している。この中には単に接続詞としての 'time' や回数を表す名詞としての 'time' も含まれているので、1054 回総てが「時間」の実質的な意味を担っているわけではない。それにしても、かなりの回数使われていて、シェイクスピアが「時間」に対して並々ならぬ関心を持っていたことが窺える。この 'time' の使い方をたどっていくとシェイクスピアがどのような時間意識を持っていたか分かるはずである。これを今「主題としての時間」としよう。演劇は時間芸術であるから、この「主題としての時間」のほかに、シェイクスピアが作品を構築するときに「時間」をどのように使ったかという、いわば、「構造としての時間」も考察しなければならない。この二つの「時間」がシェイクスピアの中でどのように扱われているかを考えてみたい。

### 1

シェイクスピアはイギリス・ルネッサンスの時代を生きた人間だが、当然のことながら、中世的な「時間」の観念を受け継いでいる。いくつか作品に即してみよう。

歴史劇では誰がどのように王冠を手に入れたかが歴史的な事実に基づいて描かれていくので、時間は直線的に流れる。登場人物たちは中世的な直線的時間の中にいる。Henry IV Part 1 の最後、シュルーズベリーの戦いで、王子 Hal との一騎打ちに倒れた Henry Percy (Hotspur) は次のように語って息を引き取る。

しよせん、心はいのちの奴隷、いのちは時の玩具 (time's fool)、  
そして時は、この世の支配者とはいえ、いずれ  
止まるべきものだ。 (5幕4場 小田島 雄志 訳)

国王 Henry 四世に激しく対立して戦った Hotspur も死を目前にして、自分の命は「時」によって弄ばれた「玩具」であったとの感慨を語っている。人間は「時の奴隷」という認識は、「時間」によ

て生は支配されていると考える中世的なとらえ方である。魔女によって「いずれ国王となる」との予言を受けた Macbeth は、一旦は、「運がおれを王にするなら運にまかせればいい、おれが手を下すことはない」(1幕3場)と考えるが、夫人からの教唆もあって、「時」の先回りをして、国王 Duncan を自らの手で殺害する。Banquo が言うように、我々には「時がはぐくむ種子を見とおす」ことはできず、「どの種子が育ち、どの種子が育たぬか」(1幕3場)分からないはずなのに、Macbeth は「時」に代わって自分で種子を育てようとした。首尾よく「種子」を発芽させることに成功するが、その芽は次第にしばみ始める。最後に妻を失い、部下も失い、四面楚歌となった Macbeth は次のような心境に至る。

明日、また明日、また明日と、時は  
小きざみな足取りで一日一日を歩み、  
歴史の最後の一瞬にたどりつく、  
昨日という日はすべて愚かな人間が塵と化す  
死への道を照らしてきた。消える、消える、  
つかの間の燈火！ 人生は歩きまわる影法師、  
あわれな役者だ、舞台の上でおおげさにみえをきっても  
出場がおわれれば消えてしまう。白痴のしゃべる  
物語だ、わめき立てる響きと怒りはすさまじいが、  
意味はなに一つありはしない。 (5幕4場)

いわば Macbeth は神が定めた「時間」に挑み、敗れる。「時間」は何も変わらずに、「一日一日を」小刻みに歩んでいることを思い知らされた Macbeth は、自分が「影法師」、「あわれな役者」であり、人生は「白痴のしゃべる物語」で、「意味はなに一つありはしない」という否定的な人生観を持つに至る。この劇を見て観客が感動するのは、Macbeth のこの人生観に共感するからではなく、彼が結果としてこのような人生観を持たざるを得なかったにせよ、「時間」に挑んだからである。この Macbeth の姿に観客は共感するのだ。挑戦に敗れた Macbeth は中世的な「時間」のなかにとどまらざるを得ない。As You Like It の中では、宮廷を追われた Orlando が下僕の Adam を連れてアーデンの森へと逃れて来るが、空腹に耐えられず、公爵一行に剣を向け食べ物と奪おうとする。身の上話を聞いて、食べ物を二人に与えた公爵は、この二人の境遇と自分の境遇とを比べてこう語る。

どうだ、不幸なのはわれわれだけではない、  
この広大な世界という舞台の上では、われわれが  
今演じている場よりもはるかに悲惨な芝居が  
演じられているのだ。

それを受けて Jaques が持論を展開する。

この世界はすべてこれ一つの舞台、  
人間は男女を問わずすべてこれ役者にすぎぬ、  
それぞれ舞台に登場してはまた退場していく、  
そしてそのあいだに一人ひとりが様々な役を演じる、  
年齢によって七幕に分かれているのだ。 (2幕7場)

そう語った後、Jaques はその「七幕」を、赤ん坊、泣き虫小学生、恋する若者、軍人、裁判官、老人、そして、歯もなく、目もなく、味もなく、何もない第二の赤ん坊、と説明する。語っているのが皮肉屋の Jaques だとしても、アーデンの森の住人達にとって、「時間」は赤ん坊から第二の赤ん坊まで定められた如く直線的に過ぎていく。

しかし、同じ As You Like It の中の Rosalind の「時間」のとらえ方は注目に値する。宮廷を追われてアーデンの森へ逃れ、男装して名前も Ganymede と変えた Rosalind が、そうとは気づかない Orlando に語る。

時はそれぞれの人によってそれぞれの速さで歩むものです。一つ教えてあげましょうか。時がだれにはのんびり歩きをし、だれにはよちよち歩きをし、だれには全力疾走し、だれには完全停止するか。 (3幕2場)

中世にあっては均一に流れているはずの「時間」が、人の主観によって速くも遅くもなるというのだ。ここには中世の「時間」意識にはない新しい近代的な「時間」意識が登場したと言ってよい。この認識を持っているのは Rosalind だけではない。“Time is out of joint”「時の関節が外れてしまった」と Hamlet は言う。ここでの“Time”とは Hamlet がこれまで信じてきた「時間」秩序そのものの謂である。この“Time”が崩壊した今、Hamlet には、母と叔父との結婚が、父王の死後、「まだ二月」、いや、「二月にもならぬ」、いや、「ほんの一月」、いや、「一月もたためのに」執り行われたと感じられるのだ。その Hamlet は最後には、Laertes との剣の試合を前に、不吉な前兆を感じながらも、

前兆などいちいち気にしてもはじまらぬ。雀一羽落ちるのも神の摂理。来るべきものは今来ればあとには来ない、あとで来ないならばいま来るだろう。今でなくても必ず来るものは来るのだ。何よりも覚悟が肝要。 (5幕2場)

と言って、神の摂理、いわば神のとおり決めた「時間」の秩序を奉じて、復讐を果たすと同時に、己の命を落とす。Hamlet の心の中にはこのように近代的な「時間」意識と中世的な「時間」意識の葛藤を見ることができる。シェイクスピア作品の中にはこのように主題として二つの「時間」が共存して

いて、シェイクスピアの「時間」への関心が窺える。

2

演劇の特徴の一つは常に時間が前に進むことである。小説や映画と比べてみれば一目瞭然である。小説や映画は時間をいとも簡単にさかのぼることができる。現在を描きながら必要なときにはすぐ過去へと戻っていくことができる。映画にもフラッシュ・バックという手法があって過去が現在に侵入してくる。演劇では登場人物によって過去が語られることはあるものの、そのまま舞台が過去に戻っていくことはない。生身の人間が観客の前で演じる以上、一瞬にして、衣装を変え、舞台装置を変えて、過去に戻っていくことはまずできない。しかし、そうした演劇の時間的制約に挑戦し、舞台上で過去にさかのぼる実験を試みた作品として、Thornton Wilder の *Our Town* と Arthur Miller の *Death of a Salesman* と Harold Pinter の *Betrayal* の 3 作品を挙げることができる。Our Town では、出産に失敗して、26 歳の若さで命を落とした Emily が、26 歳のまま、12 歳の誕生日を生き直す。この時 Emily は 26 歳と 12 歳の自分を同時に演じることになる。衣装を変えることはできないので、Emily は声と演技を変えるだけで、両者を演じ分ける。Death of a Salesman では、Willy Loman が過去を思い出すと、すぐさまその出来事が舞台上に実現する。たとえば、年を取って、ビジネスマンとしての自信を失いかけていた Loman が、二人の息子 Biff と Happy が彼を父親として尊敬していたころのことを思い出すと、息子二人が少年の姿で登場し、Loman も、そのまま、若いころの自分を演じる。親子関係破綻のきっかけになった女性パイヤーとの密会を思い出すと、その場面が舞台で演じられる。Miller はこの作品のタイトルを *Inside of His Head* にしようと思っていたらしいが、Loman の頭のなかに浮かぶ想念が、時間の順序を逆転して、そのまま舞台上で実現する。Betrayal は 9 つのシーンで構成されていて、既婚の Emma と同じく既婚の Jerry とが不倫関係 (betrayal) を続け、Emma と夫 Robert の結婚生活が破綻していく過程が描かれるが、不倫関係が明らかになって結婚生活が破綻する 1977 年がファースト・シーンで演じられ、続いて、75 年、74 年、73 年、71 年と時間をさかのぼって、不倫関係の始まる 68 年の出来事がラスト・シーンで上演される。普通なら 68 年から始めて 77 年へと時間を追って、原因から結果を描いて観客を納得させていくのであるが、Pinter はあえて時間を逆転して劇を進行させることで、結果から原因へと観客の意識を導いて、これまでの演劇にない効果を生み出そうとした。過去から現在そして未来へと流れる時間の束縛からの解放が試みられている。このような時間の逆転の発想はシェイクスピアにはない。時間を逆転させるという発想に代わって、シェイクスピアにあるのは、観客の力を借りて、時間を自由に制御しようとする発想である。

シェイクスピアの作品には、ギリシャ悲劇の「コロス」にあたる人物が登場することが少なくない。Henry V にはプロローグにその名も Chorus という人物が登場する。彼はその後、各幕のはじめに登場して、観客に想像力 *imaginary forces* を働かせて劇を見てほしいと何度も嘆願する。彼が語る有名な台詞がある。

この闘鶏場のごとき小屋に、はたしてフランスの大戦場を  
収めうるでしょうか？ この〇字形の木造小屋に  
あのアジンコートのをふるえおののかせた  
おびたしい青を詰め込みうるでしょうか？ ああ、  
どうかお許しを！ この〇の字は数字で言えばゼロですが、  
末尾につけば百万を表すことができます、そして  
百万にたいしてゼロのごときわれらは、ひとえに  
皆様の想像力におすがりするほかありません。(プロローグ)

ここでは Chorus は狭い劇場という空間に広大な空間を取り込むには観客の想像力が欠かせないことを語っているわけだが、観客の想像力を必要としているのは空間だけではない。Chorus は続けて言う。

時間を飛び越えて、実際は  
数年間にわたって積みかさねられた出来事を  
砂時計の一時間に変えるのも、皆様の想像力次第です。(プロローグ)

時間に対しても観客は想像力を働かせることを要請される。Romeo and Juliet でも、プロローグに Chorus が登場して、二人の若き「不幸な星の恋人」の物語を、

これより舞台の二時間に  
力のかぎりお目にかけます (プロローグ)

と語る。実際には、Romeo と Juliet が舞踏会で初めて出会って一目で恋におち、内密の結婚式を挙げ、Tibolt を殺害したことで Romeo がヴェローナから追放され、運命のいたずらから二人とも自らの手で命を終えるまでには相当の時間が経過するが、その時間が「二時間」に圧縮される。Pericles には Chorus として詩人 Gower が登場する。彼も Henry V の Chorus と同じように、各幕のはじめに登場して観客に語る。

私の役目は、びっこ引き引きの言葉の歩みで、  
天翔ける時の早馬を追いかけ、ごくかいつまんで  
その間の出来事をお伝えすること、しよせん  
皆様の想像力をお借りせねばそれはかないません。(第 4 幕)

ここでもまた、速い時の流れをせき止めて、その間に起きることを、短時間にかいつまんで語るのが

Chorus の役目であるという。The Winter's Tale でも Chorus 役として登場する Time が観客に向かって語る。

十六年間に飛び越えて、  
その長い歳月のあいだに生じた一切のことを  
説明抜きにいたしますが、その速すぎる飛翔を、どうか  
お叱りになりませぬよう、(中略)  
私の権限なのです。 (4 幕 1 場)

こうして 3 幕までのシチリアからボヘミアへと舞台が移り、1 幕で生まれたばかりの Perdita が 16 歳の乙女になって登場する。これら 4 人の Chorus の発言には、いずれも流れゆく時間に抗して、時間を自由に制御し、わがものにしようとする、作者シェイクスピアの意図が窺える。こうした意図は近代の作家にはしばしばみられるものだが、シェイクスピアと同時代の劇作家にはほとんど見られず、シェイクスピア独自のものである。

シェイクスピアが作品を構築する時どのように時間を操っているかをいくつかの作品を通して見てみよう。上述のように、演劇の時間は前に前進していくしかないのだが、シェイクスピアの作品のなかの時間の扱い方には、舞台での上演を観ている時には全く気が付かないのに、テキストを読んでみる矛盾だと感じられることがしばしばある。もっとも顕著なのは Othello である。Desdemona と駆け落ちをした Othello は、まだ床入れもしないうちにキプロス島への赴任を命じられる。キプロス島に着いた Othello 自身が Desdemona に語る。

さあ、おれのデズネモーナ、  
手には入れたがその恩恵に浴するのはこれからだ、  
いままで喜びを分け合う折がなかった。 (2 幕 3 場)

二人が退場すると、聞いていた Iago が、発言の真意はさておいて、Cassio に語る。

お二人の新床にさいわいあれ！ (2 幕 3 場)

その後、嫉妬心を利用して Othello を苦しめようと画策する Iago は Desdemona の侍女になっている妻の Emilia に、Othello が Desdemona に贈った苳の刺繍の入ったハンカチを盗んで来いと「百遍」も頼み込む。さらに Iago は Othello に、「最近」Cassio と一緒に寝ていた時のことだと言って、

眠りながら自分がしたことをしゃべるやつがおります。

キャッシュもそれなのです。

眠りながらこう言いました、「かわいいデズデモーナ、

気をつけよう、ぼくたちの愛が人目にたたぬように」

(中略)

叫びました、

「あなたをムーアに与えたとはなんと呪わしい運命だ！」 (3幕3場)

と嘘の証言をして Othello の猜疑心に火をつける。まだキプロスに来て一晩しかたっていないはずだから、Iago のこうした発言は矛盾なのだが、観客は気づかない。たった一晩で Othello の Desdemona に対する愛情が消えてしまうのではなく、二人の蜜月期間がかなりあったように観客に思わせようとするシェイクスピアによる劇の「構造としての時間」の操作なのだ。

Macbeth でも同じように時間が操作される。3人の魔女によって「将来の国王」(1幕3場)と予言された Macbeth は自らの手で現国王 Duncan を殺害し、王位を得ようとする。Duncan 歓迎の宴も終わり、城全体が寝静まって、いよいよ殺害が実行される。まず、何故かしら不安を感じて眠りにつけない Banquo と息子の Fleance が中庭に登場し、二人の会話から、時刻は夜中の12時を少し回ったところであることが知らされる。二人が退場すると、Macbeth は幻の短剣に導かれながら Duncan が眠る寝室へと向かう。こうして殺害は真夜中に決行される。Duncan を殺害した Macbeth は両手を真っ赤に染めて夫人のもとへやってくるが、気が付くと、殺害現場においてることになっていた短剣を手に握っている。現場に戻りたくないという取り乱す Macbeth を叱りつけながら夫人は自分で凶器を現場に置きに行き、両手を夫と同じように真っ赤に染めて戻ってくる。と突然、門を激しく叩く音が聞こえてくる。朝になって、Lennox と Macduff が王 Duncan を起こしに来たのだ。酒に酔った門番が登場し、コミック・リリーフとしての「門番の場」を演じる。舞台では12時過ぎから夜明けまでの時間が経過するが、Macbeth が Duncan の寝室へ向かってから夫人が両手を血に染めて戻ってくるまではそれほど長い時間はかからないはずだ。ここにも時間的な齟齬が見られるが、観客にも緊張を強いることになる Duncan 殺害の場を時間的に凝縮し、殺害の直後に、門番が演じる滑稽な場を設けることで、その緊張を解こうとするシェイクスピアの思惑が見て取れる。ここもまた、時間的な齟齬なのではなく、シェイクスピアは一定の効果が生まれるように時間を操作しているのだ。王殺害の直後の門をたたく大きな音は、大罪を犯して恐れおののいている Macbeth の心に、罪を告発する声のように鳴り響くという効果も生まれる。

Hamlet の冒頭を見てみよう。エルシノア城壁で歩哨に立つ Marcellus と Barnardo の前に二晩続いて先王 Hamlet の亡霊が現れる。二人は亡霊を目撃したことを信じて欲しくて、また、できれば亡霊に話しかけてもらおうという意図から、今夜は Horatio を連れてきている。時刻は真夜中の12時。亡霊が再び姿を現す。Horatio が話しかけると、亡霊は何も答えずに姿を消してしまう。亡霊を見て恐れおののき、青白い顔で、震えながらも、Horatio が敵国ノルウェーに対する先王 Hamlet の武勇伝を語っていると、再び亡霊が姿を現す。その時、朝の到来を告げる鶏の音が聞こえてくる。その声

を聴くや亡霊は慌てて姿を消す。最初に亡霊が現れ、一旦消えた後、2度目に登場するまでの間、Horatio が語るのは、わずかに数分間である。それなのに舞台上では時間が深夜から夜明けまで一気に飛んでしまう。それほどまでに短時間で夜明けになるのは、鶏の声を聴くと煉獄へ戻っていくと言われている亡霊を退場させるための方便でもあるが、それだけではない。亡霊が姿を消した後、Horatio は夜明けの到来を次のように美しい言葉で形容する。

おお、見たまえ、茜色の衣をまとった朝が、  
あの東の丘の露を踏みしめながらやってくる。 (1 幕 1 場)

Horatio はそう語った直後、「今夜われわれが目にした一部始終を、王子ハムレットに伝えよう」と、この劇で初めて王子 Hamlet に言及する。闇を切り裂き光をもたらす「茜色の衣をまとった朝」に、混迷のデンマークを立て直すことを期待された Hamlet の姿が投影される。そのためには時間を深夜から一挙に夜明けに移さねばならないと考えた作者の思いが伝わってくる。

これらの例が示すように、そして同じような例はほかの劇にもみられるが、シェイクスピアはそれぞれの劇でそれぞれにふさわしい劇的効果を狙って、劇の「構造としての時間」を操作しているのだ。

### 3

シェイクスピア最晩年の作品 *The Winter's Tale* における「時間」を見ておこう。シシリア王 Leontes は突然の嫉妬にとらえられ、妻 Hermione とこの国を訪問中のボヘミア王 Polixenes との不貞を疑い、Polixenes の殺害と Hermione の投獄を命じる。Polixenes は廷臣 Camillo の計らいでボヘミアに無事帰国する。Hermione は獄中で女兒を出産する。Leontes はこの子を不義の子と決めつけ、荒野に捨てさせる。捨てられた子はボヘミアの羊飼いに拾われ、Perdita と名付けられて育てられる。Hermione は裁判にかけられ、アポロの神託が彼女の貞潔を告げているにも拘わらず、Leontes は彼女を断罪する。その直後、王子 Mamillius が急死し、さらに女官 Paulina が Hermione の獄死を告げる。嫉妬心から妻も二人の子供も失った Leontes はこれから 16 年もの間、後悔と懺悔の日々を送る。前述の通り、この劇には 4 幕 1 場に一度だけ Chorus 役として Time が登場する。登場するなり Time は観客に向かって自らを語る。

ある人々に楽しみを与え、総ての人々に試練を課し、  
善人の喜びともなれば、悪人の恐怖ともなる私、  
間違いを起こしたり解きほぐしたりする「時」と名乗って  
翼を使わせていただきます。 (4 幕 1 場)

「翼」を使って、16 年という年月を飛び越え、その後のシシリアに舞台を移そうというわけだが、い



ずれにせよ、この劇世界での出来事はすべて「時」によって支配されていることになる。こうした時間が支配する世界のなかで、16年に及び後悔と懺悔とに明け暮れた Leontes を救ったのは、羊飼いに拾われて養育され、今や、美しい乙女に成長した Perdita である。Perdita はシシリア王 Polixenes の息子 Florizel に見染められ、愛し合っているが、Polixenes は二人の仲を認めようとしらない。二人は Polixenes のかつての友人 Leontes のもとへ救いの手を求めてやってくる。Perdita の育ての親である羊飼いの証言で、救いを求めに来た美しい乙女 Perdita が Leontes の実の娘であることが判明し、歓喜の内に、父と娘が再会を果たす。Leontes は、Florizel を追って16年ぶりにシシリアを訪れた Polixenes とも和解する。再会と和解を喜び合うものの、この喜びに暗い影を落とすのは Hermione の不在である。獄中で Hermione の死を見届けたはずの Paulina はみなを自宅に招待し、亡き Hermione の彫像を見せる。あまりに真に迫った妻の像を見て、Leontes は深く感動するが、奏でられる楽の音に合わせて、その像が動き始める。Hermione は死んでいなかった。台座から降りた Hermione は Leontes を抱きしめ、再会を果たしたわが娘 Perdita を祝福する。Paulina は確かに Hermione の死を告げた。(3幕2場) 観客もそのように信じた。シェイクスピアの作品では舞台上に起きることはすべて何らかの方法で観客には知らされるのが通常である。特に喜劇では観客には知らされていることを、登場人物は知らされず、そのギャップを観客が楽しむことが多い。シェイクスピアは全作品の中で、ただ一度、この作品で、観客をだましたことになる。作品の材源となったロバート・グリーンRobert Greeneの散文口マンズ Pandosto では、Hermione にあたる王妃は獄中で亡くなり、Hermione のように蘇ることはない。この蘇りこそこの作品の要諦であり、劇中人物たちにも観客にも死んだとばかり思われていた Hermione の像が動き出す場面には、シェイクスピアの再生への思いが込められていると言ってよい。16年前の過去の出来事をそのまま封じ込め、現在に蘇らせることで未来へとつなごうとする、この時間の操作は、喪失した時間を回復しようとしたシェイクスピアが最後に試みた力技であった。

図像学の泰斗 Erwin Panofsky は名著 *Studies in Iconology: Humanistic Themes in the Art of the Renaissance* (Harper & Row, 1972) のなかで、

人間が神の力としてではなく宇宙の特質としての無限と相対していることを知ったバロックという時代ほど、時間の観念の深さと広さ、恐ろしさと崇高さに囚われた時代はなかった。他のすべてのエリザベス朝人と違って、シェイクスピアだけが時間に助けを乞い、挑戦し、叱責し、そして征服したのだ。

と語っているが、まさに正鵠を得ていると言ってよい。他のエリザベス朝・ジェームズ朝劇作家にシェイクスピアほどの「時間」へのこだわりは見られない。現代において、シェイクスピアの作品が生き続け、他の同時代の劇作家の作品よりも上演されることが圧倒的に多いのは、シェイクスピアの作品に描かれる「時間」意識が現代人と共有されるからである。

(本稿は中京大学文化科学研究所「演劇研究グループ」2016年度研究例会での口頭発表に加筆したものである)